

英 語 科

日米協会主催「米国における英語研修講座」参加報告（Ⅱ）

英 語 教 育 を 考 え る （1）

松 本 青 也

I 概 論

（1）はじめに

ハーバード大学で板坂 元氏、牧野成一氏らによる日本語クラスを参観することができた。5～10人がテーブルを囲み、徹底した oral method で次々に pattern practice や question and answer を繰り返していくのだが、彼等の熱心な態度と素早い反応にはいささか圧倒されてしまった。その週末、板坂教授の自宅でひらかれたパーティーに集まった彼等は、日本にいる時とは逆の立場になってとまどっている私に向かって、さまざまな質問を矢つぎばやに浴びせかけてくるのだ。そして少し難しすぎるかなと思いがちの私の説明を、おおよ理解してしまう彼等が、日本語を習い始めて1、2年だという事実には私は感心するばかりだった。

反対に日本での英語の授業はどうだろう。例えば今、高1の授業で、たまたま体験入学している日本語が話せないアメリカの日系三世に参加してもらい、発音や hearing の指導を手伝ってもらっているのだが、彼に進んで話しかけようとする生徒はごくわずかで、英語を習い始めて四年目になる彼等がまれに話しかけることと言えば Do you like dogs? という程度で、それすら通じない時もあるのだ。それでいながら大学入試問題とか、それを反映した高三の実力テストの問題は外人も舌をまくほどの難しさだ。その結果平均点が30点を下まわっても我々は別に問題がむずかしいとも感じなくなってしまうし、答案に書かれた日本語が、これでも日本人かと疑うようなものであっても、我々のしていることに疑問を感じなくなってしまうのだ。我々が教えているのは実用英語でなく教養英語なのだと弁解する人がいる。しかし通じもしない発音で、やたら細かいことをただ丸暗記させたあげく、それが全く言葉として役立たないのであれば、どうしてそれを教養と呼ぶことができるだろうか。ハーバードの学生を思い出すにつけ、私は一体毎日何を教えているのかと考え込んでしまうのだ。私達

は英語を教えているのではなく、入試のために英語を使ったパズルを練習させているだけではないのだろうか。

ハーバードの学生達には、それぞれ日本語を勉強したいというはっきりした動機があった。三島由紀夫を研究したいという者もいれば、日本の民法を学ぶためにという学生もいたし、来年出張で日本に行く夫について行くので日常会話をやりたいという中年の女性も聴講していた。彼等は能力によっていくつものクラスに分けられていて、どのクラスも同じようなレベルの者全員が教師にピッタリついていき、あわよくば次は上のクラスに上ってやろうという意気込みが一種の緊迫感をかもし出していた。しかし日本にはそれがない。動機は胸に重苦しくのしかかる大学入試でしかないし、一度でも立ち遅れた者はそれ以後さっぱり授業が分からなくなり、卒業してしまうまでの何年かの間は、劣等感をいだいたまま全く報われない努力を繰り返して時間を浪費するしかないのだ。その上聞き、話す能力などは全く無視されているので、進んで外国の人々と交流しようという期待も、ことあるごとに裏切られてしまう。——やや誇張して日本の英語教育の現状を描けばそんなところではないだろうか。

この研究は、そうした入試べったりの英語教育を外国語教育の原点にさかのぼって考え直し、新たな構想のもとに再構築しようとするものであるが、今回はそのあらましを述べて来年度以降の本論の序にかえたい。

（2）問題点

まず、何故英語を教えるかが問われなければならない。それは大まかに、国際社会における communication の手段としての英語力をつけさせることと、日本語とはまるで違った頭の働き方に触れさせることで言語そのものへと、その背後にある人間への認識を深めさせることに大別できる。この二つは勿論切り離して考えることが出来ないが、特に後者に関しては、広い意味での言語教育の一環として、むしろ日本語を中心に、外国語をてこにして両者の言語構造、発想な

どを具体的に比較しながら、思考と言語との結びつきを系統的に考えさせていくような場面があってもいいのではないか。例えば「言語」の時間に一時間かけて、なぜ外国人には日本語の自発表現「れる」「られる」が分からないか(板坂 元著「日本人の論理構造」P.68)とか英語ではなぜ He robbed me of my purse. と日本語とは逆の言い方をするのかということについて考えさせるような形でもそれは実現できよう。従来の英語教育は、役に立たないという非難に対して、こうした面を、いわばかくれみのにしながら、それはいつも抽象的な言葉で語られるだけで何ら具体的に、系統的に教えていける材料を持っていなかったのだ。

この分野に関しては、外国人に日本語を教えておられる板坂、牧野両氏とか「一般意味論」の指導者 S.

I. ハヤカワ氏等の研究が多くのヒントを与えてくれた。

次に外国語の中でもなぜ英語を教えるのかという点について、その道具としての使い易さ、使える範囲、その将来性、英語に結びついている文化的遺産の質と量等、さまざまな角度から改めて考え直してみなければならぬ。

二番目に、どの程度のどんな英語を教えればいいのかという問題がある。これは中学、高校、大学と一貫して考えなければならない課題であるが、共通して言えることは従来よりレベルを低くすると同時に、自己表現の道具としての英語力をつけさせることにもっと力を入れなければならないということである。そのために特に英作文 (controlled composition → free composition) や口頭発表に大きなウエイトを置くべきであるし、その立場から今までの文法とか発音の指導を再検討してみることが必要になってくる。と同時に現場にさまざまな悪影響を与えている入試問題を同じ立場で改善することも忘れてはならない。

三番目には、そうした英語力をつけさせるにはどんな方法で教えるのが一番効果的かということである。そのためにまずいくつかの教授理論 (特に AL と CC schools) の検討と実践を通じて生徒の特質、目標にあった教授法を作り出し、さらにカリキュラムの面からは、諸外国の例を参考に、高校レベルからの選択による無学年制を実施した場合の問題点等を考え、より効果的な教育課程のあり方をさぐってみたい。

最後に、以上のような問題点にもとづいたこの研究の概要と、外国の研究諸氏が日本の英語教育の現状について述べたもののまとめを貴重な助言として付記しておきたい。

＜英語教育を考える＞

I 概 論

- (1) はじめに
- (2) 問題点

II 英語教育の目的

- (1) なぜ英語を教えるか
 - a 思考と言語——言語教育のあり方
 - b 外国語としての英語
- (2) 目標
 - a 中学、高校、大学、それぞれにおけるねらい
 - b 国際社会における自己表現の道具としての英語
 - c 入試問題のあり方 (本校の実践例も含めて)

III 英語教育の方法

- (1) 教授理論の検討
 - a Audio-Lingual Habit
 - b Transformational Grammar
 - c Situationalists
 - d Cognitive Code
- (2) 本校での実践例
- (3) カリキュラム
 - a 無学年制
 - b 選択制
 - c 諸外国の外国語カリキュラム
 - d 本校カリキュラムでの試み

The State of the Art of EFL in Japan According to Bresnahan and Haynes :

1. The Ministry has rewritten its official goals in the direction of a course more aimed at Oral Mastery of English.
2. The Ministry has not retrained its teachers in accordance with these new aims, nor has it given them texts relevant to the new skills aimed at.
3. The Ministry has not influenced the universities to change their requirements concerning English in the entrance examinations.
4. The Ministry prohibits the production of texts by overcontrolling.
5. Its demands render oral drill impossible.
6. The size of the Ministry renders change impossible.
7. Language Labs are frequently inadequately supplied with staff, equipment, or funds.
8. English classes are taught almost entirely in Japanese.
9. Foreign languages are taught as content subjects, not skill subjects.
10. Classes are dull; students are bored.

11. It is not realized by the Ministry what a special problem language teaching is.
12. If all students don't need a foreign language, a massive program is unnecessary.
13. Any foreign language requirement in schools is bad unless the student is going to learn something from it.

Some of Brownell's Criticisms of the Typical Japanese Text in English

1. They contain few explicit contrasts between Japanese and English.
2. Words are not taught in context.
3. The entire sound system of English is not aimed at.
4. Grammar is taught in its traditional Latinate description.
5. Oral mastery does not precede reading and writing in the sequences of activities.
6. Structure drills are not mentioned.
7. The inductive approach is weakened.
8. Reading is introduced too early.
9. Translation and the Dictionary are used too soon.
10. There is a de-emphasis of autonomous control of the sound system and the structure of English.
11. Literature and culture are not chosen and arranged systematically (according to difficulty and cultural content).
12. There are no recommendations for evaluation procedures.

In the Literature :

13. Many selections are written by the authors of the texts.

14. Regions of English-speaking people are not well represented.
15. Many of the selections are too childish.
16. Many of the selections are too old.

Of the Non-Literature :

17. All are written by the textbook authors.
18. The dialogues are not chosen or arranged systematically, according to language difficulty and cultural content.
19. There are few references to the school environment.
20. The dialogues are not intended for oral practice.
21. There is not an overall sequence of linguistic patterns.
22. There is not enough mention of the values of the English-speaking peoples.

In Order to Improve upon the Texts :

1. Construct and include linguistically restricted dialogues.
2. Add structure and pattern practices appropriately designed for aural-oral mastery.
3. Choose reading selections for cultural content.
4. Begin with the school environment and gradually introduce items of cultural contrast in the materials.
5. Prose selections designed to convey information about the life and culture of the target country are inferior to planned situations with appropriate dialogues.

(まつもとせいや Jan.15, '73)